

プロテスタンティズムの精神が資本主義を作り出したが、それが神を殺す結果となった

マックス・ウェーバー (1864-1924) は、「現生における欲望を敵視し、『禁欲』を求めたプロテスタンティズムの倫理が、『資本主義の精神』を生み出した」といった。キリスト教には「予定説」なる考え方があり、それによると人は生まれながらにしてその運命が決定づけられているという。

日本経済新聞 2007. 2. 23

<p>やさしい経済学—名著と現代</p>	<p>マックス・ウェーバー 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」</p>
<p>「資本主義の精神」は、プロテスタンティズムとどのよ うな関係にあるのだろうか。 この点に関し、ウェーバーは 逆説を強調する。現世におけ る欲望を敵視し、「禁欲」を 求めたプロテスタンティズム の倫理が、「資本主義の精神」 を生み出したというのであ る。</p> <p>プロテスタンティズムの教 義のうち、ウェー バーは、特にカル ヴァンの「予定説」 を重視する。予定説は、ウェ ーバーの説明に基づいて、こ 簡単にまとめると、神は経済 の対象となる人々とそれ以外 の人々をあらかじめ定めてお り、その決定は、人間がどの ように善行や祈りなどを行 ったとしても変わることはな いという教説である。</p> <p>ウェーバーが考える予定説 の役割は、次の二点にまとめ ることができる。第一は「呪</p>	<p>術(じゅじゅつ)からの解 つ)からの解</p> <p>「資本主義の精神」は、ブ 放)である。予定説から、前 近代の社会に広く浸透してい た呪術的な行為がいついっ 効であるという考えが自然に 導かれる。「呪術からの解放」 は、人々による自然と社会に 関する合理的な認識と合理的 行動の基礎となった。第二に、 予定説は「世俗内的禁欲」の 倫理を生み出した。予定説を 受け入れた人々は、自分が救</p> <p>4 「禁欲倫理」の逆説</p> <p>すなわち職業を神の定めた任 事とする見方は、ドイツ語の Berufや英語のCallingとい う職業を指す語に反映されて おり、それは、宗教改革を開 始してプロテスタンティズム の基礎を造った、マルティン ・ルターのドイツ語への聖書 翻訳に由来する。宗教改革を 継承したカルヴァン派は、そ れを予定説と結びつけた。カ ルヴァン派においては、職業 労働は神の栄光のための行為 であり、職業労働に禁欲的に 打ち込み、そこで成功して富 を得ることが「救いの確信」 をもたらすものであった。</p> <p>すなわち、確かにカルヴァ ン派は禁欲を強調したが、そ れは職業労働を怠り、あるいは 得られた富を奢侈(しゃし) 的に消費する欲望を禁じるも ので、職業労働によって富を 得ることを禁じるものではな かった。むしろ、得られた富 は、消費することなく天職の ために再投資することが倫理 的な義務とされたのである。</p>

この予定説に従うと、人は努力しても努力しなくても、その人の人生は決まったままにしか進まないことになる。ただ、この運命とは別に神は人に心の自由は与えた。この心の自由ゆえに、人は私が神に選ばれ天国のカギを与えられているかを常に考えるようになった。その人の不安に忍び寄ったのが「救いの確信」を求めるための行動であり、それが一生懸命に清

く働き多くの富を蓄えることであったという。

「予定説」から「富を蓄える」までのストーリーは、私には「風が吹くと桶屋が儲かる」という風にしか感じられないが、当時の教会がこの流れを先導した可能性はある。心清き信者たちが稼ぎ出した富の行方は？ いったい誰が得をしたのか？

予定説 (Wikipedia) には次のように記されている。

マックス・ヴェーバーは論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で、カルヴァン派の予定説が資本主義を発達させた、という論理を提出した。

救済にあずかれるかどうか全く不明であり、現世での善行も意味を持たないとすると、人々は虚無的な思想に陥るほかにないように思われる。現世でどう生きようとも救済される者は予め決まっているというのであるなら、快樂にふけるというドラスティックな対応をする者もありうるはずだ。しかし人々は実際には、「全能の神に救われるように予め定められた人間は、禁欲的に天命（ドイツ語で「Beruf」だが、この単語には「職業」という意味もある）を務めて成功する人間のはずである」という思想を持った。そして、自分こそ救済されるべき選ばれた人間であるという証しを得るために、禁欲的に職業に励もうとした。すなわち、暇を惜しんで少しでも多くの仕事をしようとし、その結果増えた収入も享樂目的には使わず更なる仕事のために使おうとした。そしてそのことが結果的に資本主義を発達させた、という論理である。

多くのプロテスタントがアメリカ大陸に渡った。そしてそこで懸命に働き富を築き上げた。その過程で、多くのインディアン（ネイティブ・アメリカン）を殺戮し、富を奪い取っていた。この行動を通してプロテスタンティズムは変質してしまったのだろうか、否、彼らはインディアンを人とはみなしていなかった可能性がある。彼らプロテスタントは自分が神に選ばれし者である証明を懸命に、しかも忠実にしただけである、と考えるとこの行動も理解できる範囲か。

そして現代、アメリカにおいて宗教は生きているか？ ましてや「予定説」は生きているか。この世に富を積み上げることは善とされるが、それは自身のための善である。神に選ばれたことを証明するための富の積み上げでないことは確かだろう。アメリカ人は自分の人生は自分自身で設計し、その設計図に従って突き進んでいく。そんな世の中となった。プロテスタンティズムの神は明らかに死んだのだ。